文字を通した子ども理解

連載

# 「子ども理解」の大切さ

広島大学大学院教授
松本仁志（まつもとひとし）

新連載がスタートしました。文字を通して子どもを理解するポイントについて、四回にわたってお話しします。

## 1 文字をどう理解するか

これら四点の「完」は、児童が教材文字（手本）を見て書いたものです。

同じ字形を見ながら書いたのに、四者四様の異なる字形が生まれています。みなさんは、この異なる字形をどのように理解し、説明するでしょうか？

児童A

児童B

児童C

児童D

教材文字（手本）

それぞれの字形や筆使いの特徴を捉え、それらの特徴が生まれた理由について、子どもの発達に関する専門知識、字形の整え方に関する専門知識、これまでの教師経験で身につけた知識などを総動員して推測することになるでしょう。そして、その推測の際には、児童A、B、C、Dという個々の子ども像をイメージしながら、また、児童A、B、C、Dが自分のクラスの子どもであれば、当該児童を思い浮かべながら推測するでしょう。文字を書いた（学習した）主体である「子ども」を抜きにして、結果として表れた字形や筆使いだけで、四者が異なる理由を解釈することはできませんし、理解をその後の指導、支援に生かすこともできません。必ず「子ども理解」が必要になるのです。

1964年，千葉県生まれ。専門は書写書道教育。光村図書 小・中学校『書写』教科書編集委員。著書に『筆順のはなし』（中央公論新社），『「書くこと」の学びを支える国語科の展開』（三省堂）など。



## 2「なぜだろう」を大切に

「子ども理解」とは、教育（保育）のために子どもをどのように捉えるかということであり、学校教育におけるすべての教育活動で求められる大切な概念です。教師と子どもの関係性、子どもの発達段階、友人関係、家庭環境、行動特性などがその視点となります。教科の学習指導においては、学習者に関する研究を背景とした実践ベースの概念として用いられています。

今回から始まる連載は、「文字を通した子ども理解」というテーマのもと、主に書写指導における「子ども理解」の考え方や方法について、次の三点から紹介していきます。

**①子どもの文字や書写の学習に対するメンタルの理解**
**②子どもの文字を書く過程に対する理解**
**③子どもの書く（書いた）文字に対する理解**

みなさんは、日々の指導、支援の中で、次のような疑問をもったことがありますか。

「なぜ、この子はうまく書けないのだろう?」
「なぜ、この子はつまらなそうに書いているのだろう?」
「なぜ、この子は楽しそうに練習しているのだろう?」
「鉛筆の持ち方や、筆順がなかなか直らないのはなぜだろう?」
「あの子は、なぜ書くのが遅いのだろう?」
「いつも読みにくい字を書くのは、なぜだろう?」
「半紙に二文字うまく収められないのは、なぜだろう?」
「横画の終筆がギザギザになるのは、なぜだろう?」

教師は、子どもの学習態度、文字を書く様子、書いた文字を見て、「なぜだろう?」と考えることが大切です。「なぜだろう?」という疑問や気づきがなければ、個々の子どもの実態に応じた適切な支援の方法は生まれてこないのですから。

次回は、①の「子どもの文字や書写の学習に対するメンタルの理解」について紹介します。なお、冒頭の「完」の字が異なる理由については、③の「子どもの書く（書いた）文字に対する理解」の回でお話しします。

光村図書ウェブサイトには、書写のご指導に役立つ情報を掲載しています。

ウェブ版「小学校国語教育相談室」
松本仁志先生 連載
「教科書活用で書写力アップ!」
https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/sodan/2020special/shosha0.html

書写「学習指導要領の方向性」
https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_shosha/newcs/index.html

小学校 書写
https://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_shosha/index.html